学校における学習 ―2―

飯　野　晴　美

Ⅰ．はじめに

学校において，子どもたちは何を学習しているのだろうか。在学期間は長くなり，少人数教育が進み，教育機器の活用も盛んになった。学校で学習する環境はより良くなっている。教科学習に加えて，総合的な学習，キャリア教育や食育と，子どもたちの将来にとって必要なものが，次々と学校教育の中に取り入れられている。そして，道徳は特別な教科にグレード・アップした。

その一方において，教員の膨大な労働時間が社会的問題として取り上げられるようになった。教員の負担増になっているとして，部活動の見直しも提案されている。

学習指導要領が数年ごとに改訂されているが，その教育的効果については明確な検証に手をつけられてはいない。はたして，子どもたちは，学校で何を学び，何を身に付けているのだろうか。教育実習を終えた学生たちの体験から見えてきた課題も加え，論じてみる。

Ⅱ．意図的な教育の限界

学校で子どもたちが学ぶことは，すべて教員から意図的に教えられることばかりではない。教員が教えられることと，教えられないこととがある。教員が意図的に教えられないから，子どもたちは学べない，とは言い切れない。子ど

もが自ら学ぶスキルを持っていれば，教えなくとも学習は成立する。

1. 暗黙の了解事項

私たちが日常生活を送る上で必要な知識やスキル等は，すべて意図的に教育されたものではない。それぞれの集団には，不文律ともいうべき「暗黙の了解事項」が存在する。この明文化されていないルールは，「誰もが理解し，承知していることなので，明文化するまでもないこと」と，多くの人は了解している。時には，意識に上ることのないまま，ルールを遵守していることさえある。

しかし，明確に言語化されていないことや明文化されていないことを，上手くキャッチできない人もいる。多くの場合，それが一時的なものであれば，キャッチできない人の存在が大きな問題になることはない。たとえば，すでにある集団に新人が加わったときである。新人は，その集団の暗黙のルールに気がつかずに，ミスを犯すこともある。次第に，そうしたルールの存在に気づき，ルールに適した行動がとれるようになる。転校生が，新しい学校に慣れるまでがこれに相当する。一方，理解されないままの状況が長期に渡ると，様相は違ってくる。この場合，不文律に気づいてない人は，自分が気づいていないことに，気づいていない。それを教えてくれる人がいても，文字になっていないことをルールとして理解できない。理解できる人にとっては，理解できない人の心の内が不思議でたまらない。人間は基本的に自分と同じような感受性をもち，思考のプロセスも似ている人のことは理解しやすい。だが，それらが異なると，相手に合わせて行動することはかなり難しい。

柏木（2013）による，次のような外国人のエピソードがこの一例である。

> 友人とバーで歓談している時，誰かが「アッ，12 時だ」と言ったら，「そろそろ帰る時間だ，腰をあげねば……」のサインだと理解できるかどうかだというのです。「12 時」が言葉どおり時刻の通告ではなく，それ以上の

ことを意味している含意を理解できなければ，「日本語がわかる」「日本語に通じている」とはいえないというのです。

これは言語の発達に通じるものです。語彙数の増加は言語発達の一要素，それ以外に語彙の含意を理解しそれを使いこなす力，相手や状況に応じて語彙や表現を的確に使い分ける力が重要です。おとなの言語能力は語彙の数量以上に，表現の質が問われるのです。

この例は，言語の発達だけに限らず，社会性や対人スキルの発達とも関係が深い問題である。教えようにも，相手にそれをキャッチする力量がなければ容易にはいかない。学校の現場においても，教員が生徒に教えることが難しい（不可能に近い）課題である。

2. ハラスメント

今年になって，スポーツ界において，パワーハラスメントの問題が相次いだ。パワーハラスメントは，パワハラと 4 文字の短縮形で表されても違和感を感じないほど，一般化した用語となった。この用語が普及するにつれ，先輩が後輩に注意したり，アドバイスをしたりするのを躊躇することも増えつつある。ハラスメントは，第一に受け取る方の感じ方，受け止め方が鍵となる。発信者の意図は二の次三の次となる。だから，後輩を思って言った言葉が，パワハラと受け止められる危険性を考えたら，黙っている方が身のためである。

教育実習を終えた学生が，実習校において校長から次のようなアドバイスをを受けたと報告した。主旨は，次のような内容であった。「授業中，机に突っ伏して寝ている生徒を起こそうとして，机をコツコツとたたくことはしないように。生徒の受け取り方によっては，パワハラになってしまうからである。」眠くなるような授業をしておきながら，眠らないように強要するのは，教員の生徒に対する越権行為である，ということなのであろうか。これでは，授業も生徒

指導も成り立たなくなってしまうのではないだろうか。

立場の弱いものを守るための取り決めが，その程度を越えると逆のハラスメントになりかねない。今，多くの学校において，精神的な健康を損ねて休職や退職に至る教員が増えている。教員自身の指導力や精神的な力に問題がある場合もあるが，すべてのケースがこれらの要因で説明できるとは限らない。「触らぬ神に祟りなし」的な対応をしていれば，教員としての地位は安泰である。しかし，それが行き過ぎれば，教員としての職務怠慢にもなりかねない。パワハラに限らず，ハラスメントの明確な判断基準も，教授するには曖昧で，複雑すぎる事項である。

3. 規範（道徳）の内面化

道徳が特別な教科となった。今までも，小，中学校では道徳の時間があった。しかし，学級活動との区別がつかないような「道徳の授業」も存在した。これまで，真っ当な道徳の授業ができなかった教員がいたとすれば，教科にしたところで授業内容が改善されるとは思えない。

道徳は，「～が善いことである」「～は正義である」というような知識を習得するものではない。各自が善き信念，信条を内面化し，それに基づいて行動できるようになることであろう。道徳の授業は，その道しるべ，ヒントを与えるものである。しかし，規範を内面化する方法や，それを行動に移すプロセスまでを教えることはできない。教員自身が，自らの信条，信念を抱き，それに基づいた実践をしていることが，大前提である。

Ⅲ.「学ぶ」こととは

佐伯（1995a）は，「学ぶ」とは「私たちが生涯つづけて行う，最も人間的な営み」であるとし，「学校で過ごす時間の何倍もの時間を，人は『教師』もなけ

れば,『教材』も与えられずに，自分で学んでいかなければならない」と，述べている。そのため，学校とは,「学ぶところであり，学び方を学ぶところである」考えている。そして，学校で学ばなければならない大切なこととして，次の三点をあげている。

①自分が何を学ぶべきかが選択できること

②自分で自分の学びが正しいか否かを判断できること

③他人や社会と交渉をもち，社会や文化から新しい知識を吸収できること

その上で,「自分が何を学ぶべきかを自分で選ぶこと。これは『学び』の第一歩であるはずですが，今日の学校教育の中で，そのような『学び』は獲得されているでしょうか。」と，疑問を呈している（佐伯，1995a)。また,「今日の私たちの社会では,『選ぶ』ということの教育はほとんどしておりません。子どもは万事，親や学校の先生によって選んでもらったコースをたどることを自明のことのように考えてしまっています。すべてが『なりゆき』の結果なのです。」とも述べている。

学校における学業成績が良くなくても，社会人として職業生活はそれなりにやっていける。仕事をうまくやっていくためには，仕事に関する狭い範囲の知識や技術を深く身に付けていれば，おおむね大丈夫である。「職人技」,「職人芸」といわれるようなものも，その一つである。つまり，学校で習った知識が幅広いのに対して，社会人として必要とされるのはそのうちのごく一部である。学校で得た知識の一部に，それぞれの職業に必要な知識を加えていくのである。

少人数の子どもたちを，大切に手をかけて育てるのが，現代の日本の実情である。大人たちが先回りして段取りを立てて，子どもたちに提示する。子どもたちは，大人たちがお膳立てしたコースに沿って生きていくことを強要されているようである。

「勉強すること」=「塾に通うこと」となった現在においては，自分のペースで

学ぶチャンスはほとんど無いのではないか。「これを覚えて」「この問題を解いて」と追いまくられていたら，課題をこなすだけで精一杯であろう。理解した満足感や喜びを感じるチャンスはほとんどないのではないか。本当に理解するためには，自分のペースで自分が納得するまで取り組むことが必要なのである。

Ⅳ．学びの実情

佐伯（1975）は，学べない人を，無気力型，ガリ勉型，ハウ・ツウ型の３つにタイプ分けしている（各タイプの解説は付録を参照）。数十年が経過した現代において，ほとんどの生徒や学生がこのいずれかのタイプに属しているように思える。それどころか，ガリ勉型やハウ・ツウ型は，「真面目で勤勉な生徒，学生」として，教員からはよい評価を得ているのではなかろうか。

1．子どもたちの興味や関心

「子どもたちの興味や関心を引く導入」や「楽しい授業となる工夫」を考える。教職課程を履修している学生たちが，授業の指導案を作成するときによく口にすることである。筆者は，これにいつも違和感を感じる。「今まで自分が知らなかったことに出会う」，「できなかったことができるようになった」，「わからなかったことが理解できた」，「不思議に思っていたことに納得できた」。いずれも「面白い，楽しい」と思う瞬間である。「これ，何？」「何してるの？」「どうして，こうするの？」子どもたちは，無邪気に質問する。自分が疑問に思うこと，知らないこと，合点がいないことに出会えば，納得しようと情報を得ようとしているのである。子どもは，まさに好奇心の塊なのである。

「子どもたちの興味や関心を引く授業」というキャッチフレーズは，「この授業内容は子どもたちにとっては面白くない課題（教材）である」という前提に

たっている。「教科学習や勉強をすることは，子どもたちにとってやりたくないこと，楽しくないこと」，という大人たちの思い込みが根本にあるように思える。それは，今の学校教育に携わっている多くの大人たちが，学校へ通うことを当然の義務と受けとり，やりたくもない学習をやらざるを得なかったこととして経験しているからであろう。

楽しく学ぶのではない，真に学ぶことは楽しいのである。これを体得することが，学校教育における学習の第一歩であり，最重要課題ではないだろうか。

また，「子どもたちの興味や関心を引く授業」が強調されたあまり，教材研究が何であるのかを根本的に思い間違っていた学生さえいた。中学校の教員免許状を取得する場合，教科教育に関する科目の単位数は以前に比べれば大幅にアップした。それにも関わらず，教材研究の意味を理解できないまま，教育実習を迎えた学生が少なからずいたのである。

①教える教材に関する，幅広く，深い知識や情報の入手。

②教材をいかに教えるかの工夫（生徒の興味や関心を引くこと）

教材研究とは②のことだと思い込み，こればかりに気をとられ，①が大前提であることに気づいていなかった（①を忘れていたり，怠っていたのではない）。

実際に授業を担当するまで，教えるには十分な知識が必要であることに気づいていなかった。生徒を前に教壇に立って，「自分が理解できていないことを，生徒に教えることはできない」，「教えるには，自分の知識は不足している」をはじめて認識した。

2.「わかる（理解する）」と「できる（記憶する・覚える）」の混同

現代の学校教育においては，「わかる（理解する）」と「できる（記憶する・覚える）」が混同されていないか。教える側も，学習する側も，「できる」と「わかる」を同じことと考えてはいまいか。

例えば，「5つの選択肢の中から答えをひとつ選ぶ問題」を考えてみる。何を

問われているのかわからずにいいかげんに選んでも，問題を読んで考えたうえで得られた解答と同じものを選択肢の中から選んでも，それが正答であれば得点が与えられる。つまり，その問題が「できた」ことになる。しかし，問題に対する両者の理解度には大きな開きがある。

「できる」としても，なぜそうすればいいのかを理解してやっている場合と，ただ言われたとおりにやっているだけの場合でも違う。コツを理解して確実に実現できるようになっていなければ，「まぐれ当たり」という表現があるように，2度目は生じにくい。

座学が中心となる教科学習においては，答え方を学んだだけであるにもかかわらず，それを「わかった」と誤解していることが多々あるのではないか。本人はもちろん，教員もである。

ある女子大学生が，中学生時代を振り返って，次のようなエピソードを語ってくれた。「中学生になると，数学は答えの出し方を覚えるだけでした。定期試験では，出題範囲が決まっているので，その範囲の例題と模範解答をひたすら覚えました。試験には，必ず例題と同じ問題が数問出題されたので，その問題は正答することができました。答えを出すことはできても，なぜこれで答えが出せるのかは，まったくわかっていませんでした。」

彼女の努力は，数学の試験である程度の得点を得ることに向けられていた。数学を理解する努力ではなかったといえる。一連の解法手続きを記憶したが，長期記憶となるまでリハーサルを行わないので，試験が終わればすぐに忘れた。大学生になった時には，こんな問題を解いたことがあるという記憶はあるが，その解き方は忘れていた。何より，数学は苦手という認識だけが強く形成された。「理解する」という本来の目的からすれば，無駄な努力と思われる。

「数学の学習方法が間違っていた」と，彼女自身が気づいたのは大学生になってからである。「なぜこれで答えが出せるのかは，まったくわかっていない」ことにさえ，気づいていなかったようである。「数学は苦手であったが，それなり

の成績はとれている。」という，認識であった。

絶対評価が導入されるようになって，よりよい評価を得るためのパフォーマンスだけを身につけた子どもたちが増えたのではないか。「試験のための学習」とは，よりよい評価を得ることが目的である。何を理解し，身につけたかは論外なのである。そして，進学の目的も，「○○卒」の学歴を得るためであって，何を学ぶかではない。

3. 発達期待や教育

国や文化の違いは，人間の発達にさまざまな影響を及ぼす。したがって，人間の個性や特徴は，社会や文化の背景抜きに論じることはできない。柏木（2013）は，その一例をあげている。

> 認知スタイルは大人にもあります。話をしている時，相手の話や質問にすぐ反応する人（衝動型）と，黙っていてなかなか答えず，ややあって答える人（抑制型／熟慮型）がいるでしょう。日本では衝動型の人はおっちょこちょいだとか，気さくだけれど思慮不足などとみなされ，熟慮型の方がよしとされる傾向があります。熟慮型という表現はいかにも「よく考える」との好印象を与えますが，逆にみれば，思ったことを率直に表現しない，失敗回避の消極的な態度で，自由な発想や個性的考えを抑えてしまうことになりがちです。

我が国では，「何も考えていないので，何も言えない」無気力な人と「あれこれ考えているが，発言は控えている」控えめな人との区別がしにくい。

また，子どもの特徴について柏木（2013）の指摘をまとめると，次のようになる。

日本の子どもでは，「持続性」「抑制」といった特徴を持っている子どもの知能や学力が高いのにたいして，アメリカの子どもでは「自発性／能動性」「独創性」が高い知能や高い学力と結びついている。このような日本の子どもの知的発達の特徴は「我慢強さ」「素直さ」「従順さ」「努力」に主眼がある発達期待に基づく社会化によるところが大きい。アメリカの母親の発達期待が「自立」「自己表現」「自己主張」であることと対照的である。

高等学校までの学校におけるカリキュラムは，学習指導要領による。教科の教授方法から，評価の仕方，生徒指導にまで及ぶ。それは，子どもたちへの発達期待であり，期待される人間像とも関係する。おおむね10年ごとに改定されているが，その内容には不可解なことも多い。しかし，いったん学習指導要領に取り入れられるやいなや，学校の教員はその内容を教授する準備に取りかからなければならない。自分自身が教わった経験もなく，それどころか時には，その内容さえほとんど知らないこともあるのではないだろうか。そして，教育熱心な保護者は，我が子が新しい内容の把握に遅れをとることのないようにと，習い事にいそしむ。子ども向けのダンス・スクールが繁盛し，小学生向けのプログラミング教室が流行っている。見方によっては，学指導要領の変遷は，しかるべき企業の繁栄と直結していると言える。我が国の現状を顧みると，不況になって家庭の支出は少なくなっても，教育費や子どもにかかる費用は削減されずに，増加することさえある。学校が絡んだ汚職や政治的な疑惑が目立ったことも，納得がいく。

先述したように，発達期待は文化的な背景から影響を受ける。したがって，教育の効果を高めるためには，文化的な背景を考慮する必要があるのではないか。これらが相矛盾するものであれば，子どもたちは，文化の継承者としても育たず，教育の効果も一時的なものとしか受け取ることはできない。長い間学校での教育を受けるほど，この矛盾にさらされ，期待される人間とはほど遠い

大人へと育っていく。文化的な背景 ── かくれたカリキュラム ── が伝えるものと矛盾することを授業で教えた場合には，子どもたちには混乱を引き起こすこともある。いわゆるダブルバインドにもなる。

我が国の伝統的な発達期待，期待される人間像とは相容れない特性や行動特徴を，現代の学校教育においては重要視しているのではないだろうか。その結果，子どもたちは，矛盾したメッセージを受け取ることになるまいか。また，それを送っている教員自身が，この矛盾に気づいていないのかもしれない。従順で真面目な人柄の人が，教員をめざすことが多い。特に教育委員会が実施する教員採用試験に合格して，公立の教員になる場合は，その傾向が強くなる。教員をめざしている学生を対象に面接の練習をしていると，どのような回答をすればいいのかをとても気にする。教員を志した理由など，正解はなく，個人個人によって異なるものでさえそうである。

人気のある小説やテレビドラマには，ユニークなどこか変わった主人公がつきものである。例えば，テレビドラマ「相棒」や「古畑任三郎」「ドクター X」の主人公は，鋭い観察眼と明晰な分析力をもっているが，ごく常識的な人物とは思えない行動様式をもっている。今春から始まった NHK の連続テレビ小説「半分，青い。」の主人公たちもユニークな存在であった。古くは，夏目漱石の小説「坊ちゃん」の主人公もその一人である。

主人公それぞれの個性は異なるが，本人が信じること，こだわりを持っていることが共通しているといえる。ときには発達障害ではと思われる人物さえもいる。一風変わった行動をする主人公は，時には周囲の人々から疎まれることもある。しかし，必ずやよき理解者がいる。

読者や視聴者から見れば，自分自身ではなかなかできそうもないことをやってのける主人公に魅力を感じるのではないだろうか。架空の世界での出来事ではあるものの，現実世界における憂さをしばしの間晴らしているともいえよう。

昨今の学校教育では，これらの主人公に似たような人物像を目標に掲げてい

るのではなかろうか。これらの主人公は少数であるから存在価値も高く，社会もその居場所を提供できる。これが多数派となれば，混乱が生じかねない。学校においても，同じことがいえよう。

Ⅴ．おわりに

人間は自分の人生を自分の力で歩んでいく必要がある。その力が子どもたちに育つように働きかけることが，大人の役割である。手助けが必要なことは何であり，見守ることが大切な時期はいつなのか，見極めることが鍵となる。あらかじめ教えることが大切なこともあれば，子どもが自ら気づくまで待つことが重要なこともある。

柏木（2013）による次の指摘も，この一例である。

> 最近，日本で注目すべきことは，通信手段の激変がコミュニケーション能力の発達に及ぼす影響です。メール，ツイッターなどが主流で手書きの手紙はおろか電話さえ稀になった状況は，語彙や表現の多様性の低下と「考える葦」としての思考能力を脅かす危険性をはらんでいます。これを「時代の子」だから仕方がないと放置できるでしょうか。人間として失ってはならないものを見極め，その発達を保証することは教育の課題，教育するものが担うべき重要な役割でしょう。

災害時に公衆電話のよさが再認識される。携帯電話が普及し，公衆電話の設置が減少している中，公衆電話を使えない子どもたちもいる。電話の使い方は，使い方の説明書きを読めばすぐに使えるようになる。しかし，誰が出るかわからない，誰からかかってきたのかわからない固定電話での対応方法は，すぐに身につくものではない。新入社員が電話応対に苦手意識をもち，なかなか受話

器を取ろうとしない。果ては，それが退職の理由ともなりかねない。いろいろな機械や器具の開発，普及によって，利便性が高まり生活が豊かになることは好ましいことである。だが，そこには人間の発達にとって落とし穴も隠されている可能性もある。

職業選択において，自分に合った職種ややりたい職種が選択できることは，理想であろう。しかし，なかなか理想通りにいかないのが現実である。「自分にできることを仕事にしよう」というアプローチの方が，実際には有効である。

どの学校においても，「みんな仲良く」を掲げた学級指導が行われている（菅野，2008）。すべてのクラスメートに対して，同じような親しみを感じることは，現実ではあり得ない。「対立関係」は問題であっても，つかず離れずといった関係であるクラスメートがいても，当たり前であろう。すべての児童，生徒，学生に同じ学力，技能や態度を身につけさせることは難しい。不可能に近い。ボトムアップは，大切である。その一方で，高等学校までが準義務教育化した現代においては，12 年間の学校教育を効果的に受けている子どもたちがどのぐらいいるか疑問が生じる。

理想像を追うがゆえに徒労に終わる学校生活を子どもたちは送り，多くの教員がそれに携わっている。理想を言葉（頭）だけで教え込み，それで満足している。だから，いつまでたっても，いじめはなくならず，不登校も増加する。

最近，文部科学省が子どもたちの生活に関わるさまざまなことに関して通達等を出している。例えば，学校における夏休みの感想文や自由研究などがネット販売されていることに関して，それを規制するように業者と交渉を交わした。また，小学校の教科書が大きくなったのに伴い，子どもたちの体に負担をかけるほどの重さになっているということで，学校にそれらを置いてもいいようにするように働きかける。学校教育がシステマティックに行われれば行われるほど，日本の教育は混沌とし，子どもたちが身に付けるものは役に立たないものになっているような気がする。

付録　学べない人間の 3 タイプ（佐伯，1980 より抜粋）

無気力型人間というのは，俗にいう「やる気のない」人間，「根性のない」人間で，勉強しろといわれれば，単に「やった」というしるしだけを，最低の要求水準をスレスレで満足させるだけで，他に何事にも興味をもたず，熱中することもなく，毎日毎日をただ何となくと生きている人間のことである。彼にとって「学ぶ」とは，暗記と言う労働（それが全く無意味であることは本人が一番よく知っている）ことであり，そのつまらぬ作業をやれというならやりますよ，要するに「やった」という証拠さえあれば「勉強した」ことになるのでしょう，それじゃあ，とにかく一時間ぐらい「一所懸命」（マル暗記）やってみますよ，それでもできなきゃわたしは頭が悪いのだからしょうがないでしょう，ということになる。

ガリ勉型人間というのは，実をいうと，さきの無気力型人間と本質的には（その人の知識というものに対するイメージに関しては）全く同じなのである。唯一のちがいは，勉強という「無意味作業」に課す要求水準の高さにあるのみで，勉強があくまで「やる」べき作業であり，やっているという動作が勉強のすべてであると考えている点で何のちがいもない。

勉強というこの無意味作業を，彼はキチンと，キレイに，コツコツとやりとげることを大切とし，いわれたことだけは絶対にやる。一所懸命，ていねいに，キチンキチンと「答え」を出し，ことばをつなぎ合わせ，なるべく「勉強作業」をやったという証拠をのこそうとして，専門語をあちこちバラまき，複雑な分析手法をむりにあてはめ，多くの本や論文を引用し，「よく勉強している」という評価を得ることだけが彼にとっての生きがいなのだ。

ハウ・ツウ型人間というものも，前の二者と似たところがあるが，若干異な

るのは彼の知識像である。彼は知識が「役に立つもの」ということを，少なくとも自分にとって大いに利用価値の高いもの，という考えはもっている。ただ，あらゆる知識の問題を，彼はすべて「やり方」の問題，うまくやる方法や手段の問題として考えるのである。彼は一般に，万事要領がよい。何か失敗すると，常に「どうやればよかったか」と考える。こうやるとうまくいく，という「知識」があればすばやく会得し，ものにする。

しかし，彼に根本的に欠けているのは，「何故？」とか「何？」という真理への問いかけてある。世の中のできごとが何故おこり，一体世間は何であるかなど全く関心がなく，要はうまくやること，とりわけ自分だけがうまくいき，「成功」することが大切だとする。

参考文献

榎本博明　2014 「聴いてるつもり」症候群　集英社
堀　裕嗣　2015　スクールカーストの正体　キレイゴト抜きのいじめ対応　小学館
飯野晴美　2018　学校における学習　明治学院大学教職課程論叢　人間の発達と教育 15　35-48
菅野　仁　2008　友だち幻想　人と人の〈つながり〉を考える　筑摩書房
柏木惠子　2008　子どもが育つ条件－家族心理学から考える　岩波書店
柏木惠子　2013　おとなが育つ条件－発達心理学から考える　岩波書店
名古屋隆彦　2017　質問する，問い返す　主体的に学ぶということ　岩波書店
佐伯　畔　1975 「学び」の構造　東洋館出版社
佐伯　畔　1995a 「わかる」ということの意味 ［新版］ 岩波書店
佐伯　畔　1995b 「学ぶ」ということの意味　岩波書店

参考資料

Blu-ray　連続テレビ小説　半分，青い。完全版１　NHK エンタープライズ
Blu-ray　連続テレビ小説　半分，青い。完全版２　NHK エンタープライズ
Blu-ray　BOX　古畑任三郎　フジテレビ